

貝原好古『和爾雅』・貝原益軒「本草名物附録」の対照

鬼頭祐太 (名古屋大学大学院人文学研究科博士後期課程)

要旨

貝原好古『和爾雅』における貝原益軒「本草名物附録」(「附録」)の利用について漢名と和名の対応及び、注文の様相という観点から検討した。まず、漢名と和名の対応については全ての対応が一致しないものが約一五%存在する一方で、過不足なく一致するものは約七割存在した。この結果は、益軒「本草綱目品目」と『和爾雅』草木門について同じ観点から対照したものと類似している。よって、『和爾雅』編纂にあたって、「附録」の漢名と和名の対応は参照、利用されたと考えられる。

一方、注文については相違するものが多く、約二割の項目で注文が過不足なく一致するものの、「附録」に見られない内容を含む注文は約六割存在した。「附録」に見られない内容を含む注文には、見出し語(正名)に対する「異名」を示すものが多く見られた。「和爾雅凡例」第三条では「凡そ一物にして数名なる者は正名を以て之を標書し異名を其の下に註す」としている。この編纂方針のもと、「異名」を何らかの文献、特に辞書類によって加えたことが想定される。

一・はじめに

本稿では貝原好古^{注一}(一六六四〜一七〇〇)が編んだ辞書『和爾雅』がどのような文献の影響下にあり、それらの成果をどのように利用して成立したのか、その一端を検討する。

『和爾雅』は元禄七年(一六九四)に刊行された意義分類体辞書である。漢字で書かれた見出し語がその意味によって天文門から言語門までの二四

の門に分けて配置されている。凡例には「元禄戊辰(稿者注…元禄元年) 魁秋日」とあるため、元禄元年(一六八八)までの成立と考えられる。岩波書店編(一九七二)によれば、元禄七年に刊行された後も正徳六年(一七一六)、享保三年(一七一八)、享保六年(一七二二)に刊行されている。

『和爾雅』の編纂方法やその過程については未だ明らかでない部分が多い。また、その書名によるのか、蜂谷(二〇〇七)、米田(二〇一四)などいくつかの研究事典における『和爾雅』の項目では、中国の辞書『爾雅』に倣ったとする記述が見られるが、『爾雅』との関係について具体的な影響関係を指摘したものはない。

近年、『和爾雅』についてはいくつかの研究がでていいる。それらの研究では、好古の叔父である貝原益軒^{注二}(一六三〇〜一七一四)との関係が示唆される。『和爾雅』が用いたとする書物については「和爾雅凡例」に示されているが、その中には益軒の著作は挙がらない。また、「和爾雅凡例」に示される書物と『和爾雅』本文の関係を示した研究は確認できていない。

笹原(二〇〇七)は益軒『続和漢名数』^{注三}における国字に関する記述と『和爾雅』の記述に共通点があることを指摘した。ただし、『続和漢名数』の刊行は『和爾雅』より遅い。『和爾雅』よりも成立が早い文献との比較を行ったのが野口(二〇二〇)である。野口は益軒『和漢名数』同『増補和漢名数』における名数についての記述と『和爾雅』の記述に共通点があることを指摘した。このうち、『和漢名数』は刊行も『和爾雅』より早い。

また、本草学関係の記述の影響関係については鬼頭(二〇二二a)が検討している。鬼頭は『和爾雅』草木門の見出し語と振り仮名について、それぞれを「漢名」と「和名」として、その対応を先行する本草関係の文献と対照した。対照した文献は林羅山『新刊多識編』(寛永八年・一六三一刊)と益軒『本草綱目品目』(寛文十二年・一六七三刊。以下、「品目」)である。磯野(二〇〇八)によれば、「品目」は寛文十二年本『本草綱目』冒頭に付された目次に相当する部分であるという。実際に確認すると、順に示された『本草綱目』の見出し語(漢名)に振り仮名(和名)が対応している。

また、『多識編』は、中田・小林(一九七七)によると、林羅山^{註四}(一五八三〜一六五七)が李時珍『本草綱目』を基に編んだ書物で、『本草綱目』に載る語を取り上げ、各語について漢字の異表記を示すほか、それぞれに羅山が和名を付したものであるという。また、『新刊多識編』、「品目」両書における漢名と和名の対応は多くが相違することが磯野によつて指摘されている。

鬼頭(二〇二二a)で、『和爾雅』、「品目」、『新刊多識編』の三書に関し、漢名と和名の対応について検討した結果、『和爾雅』と過不足なく一致するものが『新刊多識編』では約二五%と少ない一方で、「品目」では約七四%であった。他方、全く相違するものは『新刊多識編』で約三六%だが、「品目」では約五%と少ないことが分かった。また、鬼頭(二〇二二b)では『和爾雅』、「品目」両書とも、益軒・好古の出身地である筑紫の俚言が多いことを指摘した。この二つの結果は益軒が『和爾雅』の本草学関係の記述に影響し、重要な典拠となったことを示唆する。

先に述べたように『和爾雅』がどのような書物を用いて編まれたかは「和爾雅凡例」に見えるが、益軒の名前や書名は一切挙がらない。以上の調査

結果を踏まえ、鬼頭(二〇二二a:三〇)では次のことを指摘した。

「和爾雅凡例」に「本草綱目品目」の名は挙がらない。笹原(二〇〇七)、野口(二〇二〇)の指摘を併せて考えれば、複数の益軒の書物が「和爾雅凡例」に名が挙がらないものの『和爾雅』を編む中で用いられた可能性があることを示唆する。

一方で、鬼頭(二〇二二a)では課題として、「品目」が『本草綱目』の見出し語を順に並べて振り仮名の形で和名を付したのみの書物であり、『和爾雅』の注文に相当する記述がないため、どのように注文を構成したかは「品目」を検討するだけでは分からないことを挙げた。

「品目」には注文のような記述がないために、好古と益軒の示す漢名と和名の対応が異なる場合なげ異なるのか、また、どのような文献を参照した結果、そのような状況が生じたかなどは判然としない。

そこで、本稿では鬼頭(二〇二二a)を受けて、「品目」以外の益軒の手による書物で、注文を含むものを用いて検討を行う。

さらに、注文についても検討することで既に存在する益軒の成果をどのように利用しているのか考える。

寛文十二年版『本草綱目』に着目すると、「品目」のほか、益軒の手による「本草名物附録」(以下、「附録」)が収められている。「附録」は寛文十二年版『本草綱目』に「附録として組み入れられて」(磯野二〇〇八:一一一)いるもので、『益軒全集卷之六』の解説によれば、「本草名物附録は、本草綱目品目の附録にして、本草綱目の遺漏を補ひて、その品目を挙げ、各旁訓を施し、また本草綱目に載する所のものにつきて、特に先生自らの

見解を加へたるものもあり」(益軒会編一九七三…凡例二)とされる。「附録」の記述は次のようである。

(一) 告天子^{ヒハハリ} 出于三才圖繪、又常熟縣志曰一名噪天、又江陰縣志告天

「附」八ウ

このように「附録」では漢名と和名の対応だけでなく、注文も示される。

「附録」を用いて対照を行うことで、漢名と和名の対応という観点のみならず、注文の側面からも検討ができる。この点でより多角的に分析ができる。特に注文で考察の過程が示される場合もあるため、漢名と和名の対応の要因について検討できる可能性を含む。そこで、本稿では、「附録」と『和爾雅』の対照を行う。

二・漢名と和名の対応についての検討箇所

『和爾雅』の各項目は漢字の見出し語、カタカナの振り仮名、訓点付き漢文の注文で構成されている。ただし、注文は欠くことがある。項目「桔梗」を例として示す。

(二) 桔梗^{キキヤウ}
キキヤウ

一名梗草^{注五}

『和』卷七・七オ

この例では見出し語が「桔梗」、振り仮名が「キキヤウ、キチカウ」、注文が「一名梗草」である。『和爾雅』について、見出し語を漢名、振り仮名を和名としてその対応について検討を行う。

次に、「附録」についても用例を挙げ、検討箇所を示す。

(一) 再掲^{ヒハハリ} 告天子^{ヒハハリ} 出于三才圖繪、又常熟縣志曰一名噪天、又江陰縣志

告天

今回は、目的に従って「附録」についても見出し語を漢名、振り仮名を和名として、その対応について検討を行う。

また、両書の漢名(見出し語)の表記が相違していても、「附録」の注文に『和爾雅』の見出し語が出ているか、『和爾雅』の注文に「附録」の見出し語が出ているかを確認し、注文の記述から異名同物であると判断できる場合、検討対象としている。例えば、次のようなものについて異名同物を指すとみている。

(三) 苗蝦^{アミ} 海物異名記曰又謂之醬蝦、細如針芒海濱人鹽以爲醬

「附」六ウ

(四) 醬蝦^{アミ} 苗蝦、線蝦、泥蝦、並同 『和』卷之六・一二オ

(三・四)では『和爾雅』の見出し語「醬蝦」について「附録」では「又謂之醬蝦」とし、「附録」の見出し語「苗蝦」について『和爾雅』は「苗蝦(中略)並同」とする。このような場合、両者の見出し語は異なるものの、異名同物を示したものと見えるため、これらについて漢名と和名の対応を対照する。

(五) 鯉魚^{カッテ} 洞詮類要曰一名肥満魚(中略)順和名抄曰鯉加豆乎、式文

用堅魚二字○東醫寶鑑云松魚(中略)篤信案鯉魚、本邦

生南海如北海無之、東醫審鑑所謂松魚亦其形狀與鯉魚同

『和』七オ

(六) 松魚カシラダマ 出于東醫寶鑑、日本所謂加豆乎、蓋是也、和名抄、萬葉集

等鯉訓加豆乎、非是 『和』卷之六・一二ウ

(七) 蜥蜴シキヒ 明謝肇淛文海披砂云在壁曰蝮蜓常近人無毒尾擊之輒斷、在

草曰蜥蜴毒甚於蛇、又名蛇醫、毛詩傅胡爲虺蜴是

『附』六ウ

(八) 石龍子トカゲ 蜥蜴、山龍子、石蜴、並同 『和』卷之六・一〇オ

(五・六) では漢名がそれぞれ「鯉魚」、「松魚」となっているが、両書とも「東醫審鑑(寶鑑)」に載る「松魚」の記述の関連を示している。また、「加豆乎」||「松魚」||「鯉魚」とするか(附録)、「加豆乎」||「松魚」

||「鯉(魚)」とするか(和爾雅)の違いはあるが、いずれも「加豆乎」を「東醫審鑑」の「松魚」と結び付けている。さらに、(五)では「東醫審鑑

所謂松魚亦其形狀與鯉魚同」としている点で両書は異名同物を示したものと考えられよう。

(七・八) では漢名をそれぞれ「蜥蜴」、「石龍子」としているが、(八)

で「蜥蜴」が「石龍子」と同じであることが示される。そのため、両書の漢名は相違するものの、異名同物を指すものとして扱えよう。また、次のような見出しの字体が異なる例も検討対象とした。

(九) 怕痒樹サルスベリ 一名猴刺脱、花曰紫薇花、又名百日紅

『附』四ウ

(一〇) 帕痒樹サルスベリ 猴刺脱同、其花曰紫薇花、又名百日紅

『和』卷七・二一オ

(九) は一字目を「怕」とするか「帕」で相違するようになっている。ただし、版本にした時の表記の差であるとも考えられる。このような場合には、注文を参照し、異名同物に関する記述とみられるか検討した。そのうえで、異名同物とみなしうるものについては検討対象としている注六。(三) から(一〇)の例については『和爾雅』「附録」両書で示される漢名が異なるものの、それぞれが異名同物を指すと考えられる。鬼頭(二〇二一a)では注文を使った検討をしていないので、異名同物に関しては検討できなかった。本稿では注文を使った検討を行い、両書の漢名が異なる場合でも、異名同物であるとみなせるものについては、漢名が一致する事例と同様に扱うこととする。

三. 対照の方法と観点

対照の方法については鬼頭(二〇二一a)と同じものとする。用いられる仮名や仮名遣い、濁点の付し方、和名が現れる順序が相違する場合の扱いは次の①から③の通りとする。

①本稿では仮名遣いが相違していても同じ音を表すと考えられるもの(「イ」と「ヒ」と「キ」など)は同じ音とみなした。

②濁点の付し方が各書によって違う場合、清濁が対応するもの(「ケ」と「ゲ」など)は一致するとみなした。

③和名として現れる順序(振り仮名が右か左かなど)については各書で相違するか、一致するかを今回検討していない。

また、鬼頭(二〇二二a)と比較の観点もそろえる。漢名と和名の対応が『和爾雅』で示されるものと過不足なく一致するかどうかを重視し、本稿では比較した結果を次の分類A、B、Cに分けた。分類BについてはさらにB1とB2に下位分類している。

- A 漢名と和名の対応が過不足なく一致するもの。
- B 過不足があるものの、両書の漢名と和名の対応が一部一致するもの。
- B1 『和爾雅』に対して「附録」の示す和名が過分であるもの。
- B2 『和爾雅』に対して「附録」の示す和名が不足するもの。
- C 載っている漢名と和名の対応が全て一致しないもの。

まず、分類Aについて漢名「告天子」を例に見る。漢名「告天子」(『和』卷之六・八ウ、「附」八ウ)について『和爾雅』は「ヒバリ」、「附録」では「ヒハリ」を対応させている。この場合、両者の示す対応は過不足なく一致しているので、分類Aとなる。

分類B1について漢名「大黃蜂」、「方頭魚」を例としてみる。漢名「大黃蜂」(『和』卷之六・一五オ、「附」六オ)をみると、『和爾雅』は「ヤマバチ」、「附録」では「ヤマハチ・クマバチ」がそれぞれ対応している。この場合、『和爾雅』よりも「附録」で示される和名が多く、過分である。次に分類B2について例示する。漢名「方頭魚」(『和』卷之六・二二ウ、「附」七オ)をみると、『和爾雅』は「クズナ・カナガシラ」、「附録」では「クズナ」がそれぞれ対応している。『和爾雅』よりも「附録」で示される和名が少なく、不足する。以上のB1、B2を併せて示す際には、分類Bと呼ぶ。

分類Cについて、まず、『和爾雅』で示される和名が一つであるものをみる。漢名「草蛭」(『和』卷之六・一六オ、「附」六オ)をみると『和爾雅』には「クサビル」、「附録」では「ヤマビル」がそれぞれ対応しており、両書の対応は相違する。次に、和名が複数示される例をみる。漢名「鹿尾菜」(『和』卷七・五ウ、「附」二ウ)を見ると『和爾雅』には「ロクミサイ・ヒジキ」、「附録」では「ヒスキモ」がそれぞれ対応しており、相違する。こうしたものを分類Cとした。

分類Aの割合が多ければ、両書がよく一致することを示す。一方で、分類Cの割合が多ければ、両書が一致しないことを示す。また、分類B1については分類Aと類似するが、何らかの理由で「附録」の一部を利用しなかったものである。分類B2は「附録」以外の書物を加えたものであるため、分類Cに類似する。

先にも述べたように、鬼頭(二〇二二a)では、『和爾雅』と「品目」の和名の対応の割合は分類Aが七割を超え、分類Cは約五%である一方で、他方、『和爾雅』と『新刊多識編』との対照では分類Aが約二六%、分類Cが約三六%であることを確かめた。

四．観察の結果

両書ともに載る漢名が一四六例存在し、そのうち、和名が示されないものが五例存在した。残る一四一例について対照し、分類A〜Cに分けた結果を表一に示す。参考として、鬼頭(二〇二二a)で「品目」と『和爾雅』草木門を対照した結果を示す。各行の数字は用例数で、カッコ内は百分率である。

【表一】『和爾雅』と「附録」の対照結果^{注7}

附録との対照結果	
98 (69.50)	分類A
2 (1.42)	分類B 1
19 (13.48)	分類B 2
22 (15.60)	分類C
141 (100)	合計
【参考】品目との対照結果	
144 (74.2)	分類A
40 (20.6)	分類B
10 (5.2)	分類C
194 (100)	合計

分類Aは「品目」と『和爾雅』草木門を対照した結果より、やや割合が低いものの、「品目」と比較したときと同様、約七割は存在する。一方、「品目」と対照した際には分類B(B 1、B 2)よりも分類Cが明らかに少なかった。しかし、「附録」と『和爾雅』を対照した限り、分類Bと分類Cの割合はほぼ同じであり、むしろ、分類Cの割合がやや多いことが分かる。分類Bの二一例の内、B 2は一九例存在する。また、分類Cの割合は「品目」と対照した結果よりも多かったものの、分類Aや分類B 1も少なくないことから、「附録」についても『和爾雅』の編纂にあたって参照した部分が少なくないことを示す。ただし、記述を検討した結果、他の文献に依るところが多くなったため、「品目」との対照の結果よりも分類B 2や分類Cが増加したと考えられる。益軒の著作であっても、書物により、その影響のあり方が違うことを示唆する。

四．一．草木門のみを対象とした場合

前節でみたものは『和爾雅』の部門について制限していない。鬼頭(二〇二二a)と対照する部門を揃えて、「附録」と『和爾雅』草木門のみを対照した。その結果は次の表二のようであった。

【表二】『和爾雅』草木門と「附録」の対照結果

対照結果	分類
32 (68.09)	A
0 (0)	B 1
7 (14.89)	B 2
8 (17.02)	C
47 (100)	合計

この結果は「附録」全体について『和爾雅』と対照したものと大きく相違しない。つまり、分類Aが約七割で、分類B・Cがそれぞれ同じ程度という様相である。このことから、検討した箇所による結果の偏りもないと考えられる。つまり、「附録」の漢名と和名の対応は「品目」の物より、『和爾雅』に示されるものと共通しないといえる。とはいえAが七割近く存在し、両書で示すものが多く一致する。「品目」よりは他の文献を参考にする点が多かったと考えられるが、「附録」に示される漢名と和名の対応が『和爾雅』の編纂において、参照され、利用されたことを示す。

五．注文に関する検討

以上みてきたように「附録」と『和爾雅』両書の漢名と和名の対応の傾向は、「品目」と対照した結果とおよそ類似していた。続けて、注文の様相について検討する。対象とするのは先に漢名と和名の対応についてみた一四一の項目とし、それらの注文に関して「附録」、『和爾雅』での様相を検討する。注文の対照についても漢名と和名の対応と同様に記述の過不足という観点をを用い、A、B 1、B 2、Cの四つに分類する。

五．一．注文分類の基準

分類Aの例を示す(一一〜一四)。これは「附録」と『和爾雅』の両書の

注文が過不足なく一致するものである。両書ともに注文がないもの(二・三・一四)を含む。(二・三・一四)のように両書とも注文がないものは七組存在した。

- (二一) カイツブリ 字彙云好入水食、似鳧而小 「附」八ウ
- (二二) カイツブリ 注八 字彙云好入水食、似鳧而小 『和』卷之六・六ウ
- (二三) チヤボ 矮鶏 「附」八オ
- (二四) チヤボ 矮鶏 『和』卷之六・七オ

ただし、注文はその性格上、同じ内容の記述を意図したとみられる場合でも、表現が異なることがある。(一五・一六)では両書とも出典として「閩書」を挙げることを意図したと考えられるが、表現の仕方は異なる。また、(九・一〇)では「二名」とするか、しないか、「其花曰紫薇花」とするか、「花曰紫薇花」という点で相違する。こうしたものについても内容が一致し、過不足がないため、分類Aとした。

- (二五) カツノコ 鱧魛魚 閩書 「附」六ウ
- (二六) カツノコガレイ 鱧魛魚 出于閩書 『和』卷之六・一一ウ
- (九・再掲) サルスベリ 怕痒樹 一名猴刺脱、花曰紫薇花、又名百日紅
- (一〇・再掲) サルスベリ 怕痒樹 猴刺脱同、其花曰紫薇花、又名百日紅

次に分類B1の例を示す(一七〜二二)。これは「附録」と共通する部分があるが、一部を使っていないものである。ここでいう「共通する」は分類Aの時と同様、全く同じものだけでなく同じ内容の記述を意図したとみ

られるものを含む(二一・二二)。「共通する」に関しては以下も同様の基準とする。共通する「附録」の記述に傍線を付す。

>

- (一七) アホウトリ 信天翁 一名漫畫 又名信天緣、見于潛確類書、事言要玄 「附」八オ
- (一八) アホウトリ 信天翁 一名漫畫、見于潛確類書 『和』卷之六・九オ
- (一九) マツライ 松茸 陳仁玉菌譜曰出松陰、凡物松出無不可愛者、治洩瀉不禁食之有效、又松耳東醫寶鑑曰性平味甘無毒、甚香美有松氣、生山中古松樹下、假粉氣而生、木茸中第一也 「附」五ウ

- (二〇) マツダケ 松茸 陳仁玉菌譜曰松茸生松陰、凡物松出無不可愛者、治洩瀉不禁食之有效 『和』卷七・五オ
- (二一) キナズイ 菊虎 一名菊牛、農政全書 「附」六オ
- (二二) キナズイ 菊虎 見于農政全書 『和』卷之六・一九オ

次に分類B2の例を示す(二三〜二八)。「附録」と共通する部分があるものの、「附録」には見られない記述を含むものであり、分類Cと同じく「附録」以外の文献の影響があったことを示す。共通する「附録」の記述に傍線を付す。また、分類B1では、『和爾雅』の記述は基本的にすべて「附録」に載るため、『和爾雅』の記述に傍線を付さなかった。一方で、分類B2は『和爾雅』の記述のうち、「附録」に載らない部分があるため、「附録」と共通する箇所を示すために『和爾雅』の記述にも傍線を付した。

- (二三) イヌモミ 海髮 順和名抄○篤信云案此物有毒不可食往往殺人

(二四) 海髮イギス 見于和名抄、又云小凝菜 『和』卷七・五ウ

(二五) 平地木ツバキ 出於遵生八牋及唐詩畫譜、又号通仙木、小青樹 『附』四オ・ウ

(二六) 平地木タチバナ 高五六寸而有小紅實者見于遵生八牋及畫譜、又名小青樹、通仙木 『和』卷七・一五オ

『附』九オ

(二七) 果下馬トサゴマ 出於大明一統志 『和』卷之六・二オ

(二八) 果下馬トサゴマ 出於大明一統志、是日本土佐駒也 『和』卷之六・二オ

最後に分類Cの例を示す(二九～三二)。一切、「附録」の記述を含まないものである。(三一・三二)は「附録」に注文がないものの、『和爾雅』に注文がみられる例である。こうしたものは二三組注九存在した。

(二九) 油桃ツバイモ 篤信曰其實似山茶子、本草綱目桃條下有之 『附』五オ

(三〇) 油桃ツバイモ 李桃、光桃、並同 『和』卷之六・二六ウ

(七・再掲) 蜥蜴ツバキ 明謝肇淛文海披砂云在壁曰蜺蜺常近人無毒尾擊之輒斷、在草曰蜥蜴毒甚於蛇、又名蛇醫、毛詩傳胡爲虺蜴是也

(八・再掲) 石籠子トクメ 蜥蜴、山籠子、石蜴、並同

(三一) 鶉鷄ツクマル 『附』八オ

(三二) 鶉鷄ツクマル 鶉鷄同 『和』卷之六・七オ

漢名と和名の対応について検討した結果と同様、分類Aが多ければ、すでに存在する益軒の著作や成果をそのまま利用したものと考えられる。他方、分類Cが多い場合は益軒の著作を引き写すのではなく、他の文献を利用したことを示す。

また、分類B1、B2についてもAほどではないものの、益軒の著作が参考になったといえる。ただし、B2はCと同様に、益軒の著作以外の文献を用いており、好古が益軒の単なる引き写しを行うだけでなかったことを示す。B2やCが多い場合は漢名と和名の対応と異なる状況である。

五. 二. 注文についての対照結果と分析

先の基準に従って、分類AからCに用例を分けた結果が次の表三である。

【表三】『和爾雅』と「附録」の注文の様相

注文の様相	分類
31(21.99)	A
20(14.18)	B 1
42(29.79)	B 2
48(34.04)	C
141(100)	合計

表三から、注文の様相についても過不足なく一致するものは存在するものの、漢名と和名の対応に関する結果よりは、益軒の示すところをそのまま使わないものが多いことがわかる。特に分類Cの割合は三割を超えており、漢名と和名の対応とは状況が全く相違する。先にも述べ

たように、「附録」には注文がないものの、『和爾雅』に注文があるものが二三例存在し、これは全体の二一・三二%である。仮に、「附録」に注文がなく、『和爾雅』に注文があるものを除いたとしても、分類Cにあたるものは二五例(二七・七三%)存在する。また、分類B2のように「附録」に

見られない記述を持つものが四二例（二九・七九％）存在した。分類B2と分類Cの合計が六割を超えるという点は和名の対応とは大きく異なる。

分類B2やCについて「附録」に見えない記述がどのようなものであるかを見よう。比較的多くみられるのが見出し語の異名（異表記）を書いたとみられるものである。先にも見た（二九・三〇）や（三一・三二）や、次に示す（三三〜四二）のようなものがある。特に、（三四）や（三六）のように、出典を示さずに異名が連ねられるものが多くみられる。

- (三三) 山礬シラカバ 瑞香、七里香 「附」四ウ
- (三四) 山礬シラカバ 芸香、掟花、七里香、並同、和名沉丁花 「和」卷七・一九ウ
- (三五) 鱧魚イダリ 同上（稿者注「閩書」のこと） 「附」六ウ
- (三六) 鱧魚イダリ 望潮魚同、見于閩書 「和」卷之六・一一ウ
- (三七) 海膽ウダマ 同上（稿者注「閩書」のこと） 「附」八オ
- (三八) 海膽ウダマ 見于閩書、石槿、靈羸、棘甲螺、蓋皆同類而有二種 「和」卷之六・一四ウ
- (三九) 鳳蝶アサギ 鳳子、鳳車、鬼車、並同 「附」六オ
- (四〇) 鳳蝶アサギ 「和」卷之六・一五ウ
- (四一) 映山紅アホケキリ 「附」四オ
- (四二) 映山紅アホケキリ 紅躑躅同 「和」卷七・一一ウ

特に分類Cでは四八例中、二四例が異名を示すもので、そのうち、二三例には出典が付されない。分類B2についても、異名が増加し、文献名は

示されないものが四二例中、九例存在する。

こうした両書の記述の仕方の違いは『和爾雅』が辞書として「異名」を示そうとしていることも関連するのであろう。「和爾雅凡例」第三条では「凡そ一物而数名なる者は正名を以て之を標書し異名を其の下に註す」としている。分類Cは「附録」に注文がないものであり、そうしたものに關する「異名」を何らかの文献、特に辞書類によつて加えたことが想定される。その多くには典拠が明示されなため、何によつたかは、別途検討を要する。

以上みたように、漢名と和名の対応とは異なり、注文については一致しないものが少なくない。また、「附録」に見えない記述を含むものも多く見られる。こうした様相から『和爾雅』における「附録」からの直接の影響は、漢名と和名の対応では大きいものの、注文への影響は比較的少ないといえる。

五・三・和名の対応と注文の様相の關係

ここまで述べてきたように「附録」の注文からの影響は比較的小さいとみられる。ただし、漢名と和名の対応と注文の様相に何らかの關係がみられるかは検討すべきであろう。両書の漢名と和名の対応、注文の対応について併せてみると、表四のようになる。

【表四】漢名と和名の対応と注文の様相の関係性注一〇

注文の様相					和名の対応
合計	C	B 2	B 1	A	
98 (69.50)	25 (17.73)	34 (24.11)	16 (11.35)	23 (16.31)	A
2 (1.42)	1 (0.71)	0 (0)	1 (0.71)	0 (0)	B 1
19 (13.48)	10 (7.09)	5 (3.55)	0 (0)	4 (2.84)	B 2
22 (15.60)	12 (8.51)	3 (2.13)	3 (2.13)	4 (2.84)	C
141 (100)	48 (34.04)	42 (29.79)	20 (14.18)	31 (21.99)	合計

足なく一致するとしても、注文は一致しただけでなく、他の文献による部分が多いということである。

注文の様相から見れば、分類A・B1・B2である場合、漢名と和名の対応は七割以上が分類Aとなる。例として、注文の様相が分類Aである三例をみる、二三例(七四・一九%)が和名の対応において分類Aとなる。注文が過不足なく一致する場合、和名についても一致するものが多いとい

表四から、以下のことがわかる。漢名と和名の対応では分類Aがもっとも多いものの、それらについて、注文の様相が分類AからCのいずれかに偏るということはない。しかし、和名の対応が分類Aのとき、注文の様相は、分類B2が最も多く、分類Cがこれに次ぐ。この二つが和名の対応が分類Aである九八例中の約六割を占める。つまり、和名が両書で過不足なく一致するものが多いとい

えよう。その一方で、注文の様相が分類Cとなる四八例のうち、和名の対応が分類Aであるのは二五例と五割程度で、分類B2と分類Cが合わせて二二例とおよそ四五%存在する。

このことは注文の様相が益軒の示すところに一致しない場合、和名もまた、益軒の示すところに一致しないものが比較的多いことを示す。

以上、見てきたように「附録」、『和爾雅』両書の注文の様相は漢名と和名の対応とは異なり、益軒の示すところと一致しないものが多い。また、和名の対応と注文の様相の間に関係はあまり見だせず、漢名と和名の対応が過不足なく一致する場合でも注文については全てもしくは一部が他の文献によるとみられるものが少なくことが分かった。

六・まとめと今後の課題

以上、益軒「附録」と好古『和爾雅』の漢名と和名の対応を検討した。『和爾雅』について漢名と和名の対応を益軒「品目」と対照した結果と比べると、分類Aがやや少ないものの、約七割存在しており、益軒から影響を受け、益軒の示すところをそのまま利用するものが少なくないことを示す。

一方で、「品目」と対照した際の結果とは異なり、分類Cは分類Bと同じ程度存在していた。また、分類Cの割合は「品目」よりも高い。こうした状況からは、元となった書物によって漢名と和名の対応についての益軒の影響の在り方も異なることが想定される。和名についての出典は『和爾雅』で明示されていないが、以上の検討によって、本草学関係の部門における和名については益軒が示すところが参考となったことを示せたと考える。

また、注文についても「附録」と対照した。その結果、漢名と和名の対

応とは異なり、分類Cが一定数見られた。また分類B2も多く存在し、分類Cと合わせると六割を超えていた。これは注文については「附録」以外の文献を利用するところが多かったことを示す。

分類B2や分類Cには、「附録」に載らない見出し語の「異名」を示すものが多くみられる。特に『和爾雅』には典拠を明示することなく、「異名」を示したものが多く存在した。このことは、「和爾雅凡例」第三条に述べるように『和爾雅』が辞書として「正名」に対する「異名」を示す目的があったことと無関係ではないだろう。

また、漢名と和名の対応と、注文の様相の間に、関係はほとんど見られなかった。例えば和名の対応が分類Aであるとき、注文が分類Aから分類Cのいずれであるかは特に傾向がない。和名の対応が分類Aの時、分類B2や分類Cであるものを合わせると、六割を超えていた。一方、和名の対応がCの時でも注文の様相が分類Aであるものも見られる。ただし、注文の様相が分類A、B1、B2の場合、和名の対応については分類Aであるものが多く、注文の様相が分類Cの場合、和名の対応も分類Cとなるものが比較的多かった。

この結果から、漢名と和名の対応に関しては益軒の記述を参照し、そのまま利用することが多かったものの、注文については何らかの別の書物によったと考えられる。特に、注文については「附録」の記述を一切含まない場合、和名についても益軒が示すところに従わないものが多いため、これらについては和名も注文を取った文献に一致する可能性がある。

今後、「品目」についても『和爾雅』草木門以外との対照を行う必要がある。本稿では『和爾雅』草木門以外の部門に属する語についても「附録」と対照している。草木門以外での対照を通じて、その傾向をみる必要がある。

る。

また、益軒以外の著作が参照されたとするとどのような書物が想定できるか、調査する。これは「附録」や「品目」といった益軒の著作の収載語彙が『和爾雅』に収められた語彙よりも少なく、分野についても限られているためである。例えば、「和爾雅凡例」にはいくつかの書物の名前が挙げられる。その内の意義分類体の辞書などとの比較を行うことで、『和爾雅』の成立背景を明らかにしたい。

【参考文献】

一．使用テキスト

- 『本草綱目』（本草名物附録）：京都大学附属図書館富士川文庫所蔵 寛文十二年刊（重刊）本草綱目 五二巻（序目・図・巻1―52）（請求番号：ホ／43）：京都大学貴重資料デジタルアーカイブ <https://mda.kulib.kyoto-u.ac.jp/> で閲覧した。（二〇二三年八月二一日最終閲覧）
- 『和爾雅』：早稲田大学蔵元禄七年刊『和爾雅』（請求番号：ホ02 04852）：「早稲田大学図書館古典籍総合データベース」 https://www.wvl.waseda.ac.jp/koten_seki/index.html で閲覧した。（二〇二三年八月二一日最終閲覧）
- 国文学研究資料館蔵本、和古書（請求記号：マ3―18―119）
- 「国書データベース」 <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/200004484/> で閲覧した。（二〇二三年八月二一日最終閲覧）

二．辞書記述、論文等

- 磯野直秀（二〇〇八）「日本博物学史覚え書XIV」『慶應義塾大学日吉紀要 自然科学』四四 九九―一二四頁 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会

井上忠 (一九六三) 『貝原益軒』吉川弘文館

井上忠 (一九八三 a) 「貝原好古」日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典 第一卷』岩波書店

井上忠 (一九八三 b) 「貝原益軒」日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典 第一卷』岩波書店

井原孝一 (一九五八) 「益軒号私攷」『香椎潟』四二六—三二頁、福岡女子大学国文学会

岩波書店編 (一九七二) 『国書総目録 第八卷』岩波書店

上野益三 (一九七三) 『日本博物学史』平凡社

益軒会編 (一九一一、後一九七三) 『益軒全集全八卷之六』国書刊行会 益軒全集刊行部 (一九一一) の複製

河野敏宏 (二〇一四) 「本草綱目」佐藤武義、前田富祺 (編集代表) 『日本語大事典 (下)』朝倉書店

鬼頭祐太 (二〇二二 a) 「貝原好古『和爾雅』草木門における漢名と和名の対応について—貝原益軒からの影響を中心に—」『名古屋大学人文学フォーラム』五一—七—三三頁、名古屋大学大学院人文学研究科図書・論集委員会

鬼頭祐太 (二〇二二 b) 「貝原益軒『本草綱目品目』・貝原好古『和爾雅』における俚言—益軒『大和本草』との対照—」『名古屋大学国語国文学』一一五—三三—四九頁、名古屋大学国語国文学会

笹原宏之 (二〇〇七) 「第一部第一章 国字の定義と分類」『国字の位相と展開』三二—一九七頁、三省堂

杉本つとむ (二〇一一) 『日本本草学の世界—自然・医薬・民俗語彙の探求—』八坂書房

中田祝夫・小林祥次郎 (一九七七) 『多識編自筆稿本三冊研究並びに総合索引

索引篇』勉誠社

野口隆 (二〇二〇) 「延宝版『倭漢名数』および『増補和漢名数』について」『国語国文』八九 (二) 一一—一八頁、臨川書店

蜂谷清人 (二〇〇七) 「和爾雅」飛田良文 (編者主幹) 他『日本語学研究事典』明治書院

堀勇雄 (一九八四) 「林羅山」日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典 第五卷』岩波書店

米田達郎 (二〇一四) 「和爾雅」佐藤武義、前田富祺 (編集代表) 『日本語大事典 (下)』朝倉書店

渡邊幸三 (一九五三) 「李時珍の本草綱目とその版本」『東洋史研究』一二 (四) 三三—三五七頁、東洋史研究会

〔注〕

一 井上 (一九八三 a) によれば、好古は名、字は敏夫、通称は市之進、号は耻軒。貝原益軒の甥 (益軒の兄の子) だという。本稿では「(貝原) 好古」と称す。

二 井上 (一九八三 b) によれば、名は篤信、字は子誠、通称は久兵衛、号は初め柔斎、後に損軒、晩年に益軒としたという。井原 (一九五八) によれば、貝原益軒が「益軒」と号したのは彼が七八歳ごろからで、それ以前には「損軒」と号していたという。『和爾雅』が編まれた時期も「損軒」と号していたが、本稿では「(貝原) 益軒」と称す。

三 野口 (二〇二〇) によれば、『和漢名数』は延宝六年 (一六七八)、『増補和漢名数』は元禄五年 (一六九二)、『続和漢名数』は元禄八年 (一六九五) の刊行。

四

堀（一九八四）によれば通称又三郎、名は道春など、字は子信、号は羅山、浮山など。京都生まれ。

五

『和爾雅』の注文は本来割注であるが、本稿では割注の形では示さず、一行に改めた。『和爾雅』以外の資料に関しても割注などの双行のものについては原典の形をそのままに引用せず、適宜改めた箇所がある。また、引用に際して『和爾雅』を『和』、「附録」は「附」と示し、対象とした書物での用例の所在地を表示した。

六

こうした（三）〜（一〇）のような例は今回検討した一四一例中二一例存在した。具体的な様相について、表五に示す。分類A〜Cについては本稿三節参照。

【表五】両書の漢名（見出し語）、字形に相違がみられる例についての様相

注目の様相					和名の対応
合計	C	B 2	B 1	A	
10 (47.62)	3 (14.29)	3 (14.29)	2 (9.52)	2 (9.52)	A
0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	B 1
7 (33.33)	5 (23.81)	1 (4.76)	0 (0)	1 (4.76)	B 2
4 (19.05)	4 (19.05)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	C
21 (100)	12 (57.14)	4 (19.05)	2 (9.52)	3 (14.29)	合計

表五に示したように、和名の対応については分類Aが全体の五割未満であり、分類B2が三割を超えるなど、一四一例全体の傾向よりも益軒の示すところ以外を使うものが多い。注目の様相に関しては一四一例全体と比較した際よりも、分類Cが二割以上増加している。こうした結果からは、見出し語や字形が相違する場合、「附録」以外の文献によったことを示唆するといえるだろう。

七

「品目」では分類Bが四〇例存在する。鬼頭（二〇二二a）ではB1、B2に分けて検討していなかった。改めて、分類すると、B1は一一例（五・六七％）、B2は二九例（二四・九五％）存在した。

八

「II」は「冬+鳥」。（二二）の「II」も同様である。漢名と和名の対応の際には「附録」に和名が載らず、『和爾雅』に和名があるものについて、検討していない。これは鬼頭（二〇二二a）に検討基準

をそろえた結果である。「附録」和名無、『和爾雅』和名有の例は今回観察した範囲で七例得られた。

一〇 ここで、和名の対応と、注文の様相についての部門別の偏りについて言及しておく。今回、対象とした一四一例は『和爾雅』の以下の一〇の部門にわたっている。部門順に示す。()内は用例数である。

宝貨(三)、畜獸(四)、禽鳥(八)、龍魚(二二)、蟲介(二三)、米穀

(五)、飲食(四)、果蔬(七)、菜蔬(一九)、草木(四七)

草木門を除いて用例数が少ないため、割合の分析については、参考程度にしかないが、分析すると次のようになる。和名についてみると、分類Aが全体(六九・五%)より一〇%以上少ない部門は飲食(二例、五〇%)、果蔬(四例、五七・一四%)である。一方、分類Cが全体(二五・六〇%)よりも一〇%以上多いのは、蟲介(六例、二六・〇九%)、飲食(二例、五〇%)であった。これらの部門は全体平均よりも「附録」と相違する和名の対応の割合が多い。特に、飲食門では、その傾向が強い。他方、注文については分類Aや分類Cであったとしても偏りは見られなかった。